
 学 会 記 事

第 91 回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成 22 年 5 月 22 日 (土)
午後 3 時～
会 場 万代シルバーホテル

I. 一 般 演 題
1 当科で経験した甲状腺クリーゼの 3 例

植村 靖行・北澤 勝・森川 洋
石澤 正博・金子 正儀・鈴木 浩史
松林 泰弘・鈴木 裕美・小菅恵一朗
羽入 修・相澤 義房

新潟大学医学部第一内科

甲状腺クリーゼは発症機序や誘因が必ずしも明らかになっていない病態である。また、明確な診断基準や治療指針が存在しておらず、2008 年に発表された診断基準を元に全国調査を行っているところである。

2008 年 4 月から 2009 年 12 月までの間に当科で経験した甲状腺クリーゼの 3 例について基礎疾患・発症誘因・検査所見・治療・予後についてまとめた。

①高齢者は容易にクリーゼに移行するため外傷時やアイソトープ治療時には入院の上、慎重な全身管理が必要であると考えられた。

②クリーゼによる症状が単なる併発症なのか判断に困る場合があるが、救命のためには疑い例であってもクリーゼに準じた対応が求められると考えられる。甲状腺クリーゼはバセドウ病の早期診断や術前甲状腺機能の管理が行われるようになり減少してきているが、未だ致死率が高い病態である。他科の医師が診療に当たる機会も多

く、早期に診断基準の確立と治療方針の作成が望まれる。

2 エコーガイド下、甲状腺穿刺細胞診への取り組み～3年間の結果～

宗田 聡・佐藤さつき・山田 貴穂

新潟市民病院内科

甲状腺細胞診の新しい報告様式により、細胞診の管理精度は付帯事項として検体不適切検体数は検査総数の 10 % 以下に留めることが望ましいとされている。安定した検査体制と精度に対応すべく、当科は 2007 年 12 月より 2 人検査体制でのエコーガイド下交差法を用いた甲状腺穿刺細胞診に取り組んだ。開始時から 2010 年 4 月までの検査結果をまとめたところ、検体適切率は 48.0 % から 74.0 % までに改善した。甲状腺エコーの被験者数はのべ 895 名、結節病変は 454 箇所を認めた。そのうち、組織診断で悪性と診断されたのは 48 症例 (10.8 %) であった。パパンニコウのクラス分類のクラスⅢ以上の検査精度は、鋭敏度 91.7 %, 特異度 47.6 % であった。今後、更なる検査技術の向上に努めるとともに予後に対しても注目して観察する必要がある。

3 イレッサが奏功したと考えられる進行甲状腺癌肺転移の 2 例

片桐 尚・本田 茂・涌井一郎

厚生連刈羽郡総合病院内科

進行甲状腺癌肺転移の症例に対してイレッサを使用し奏効した (進行を抑制した) と考えられる 2 例を経験した。

〔症例 1〕43 歳、女性。低分化扁平上皮癌、EP 療法、原発巣切除の後、肺転移にイレッサ (16 ヶ月)、その後 Carboplatin + Weekly Paclitaxel 併用療法を (19 ヶ月) 継続投与、この間在宅医療が可能となり、治療開始後 3 年 3 ヶ月の延命効果を認めた。

〔症例 2〕59 歳、女性。乳頭癌、原発巣切除、アイソトープ内照射施行、その後急速に増大した肺